



Title	『妖精ヘルツィーニエの牧歌詩』について
Author(s)	福沢, 栄司
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学. 1975, 16, p.129-140
Issue Date	1975
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/9652">http://hdl.handle.net/10069/9652</a>
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-20T02:36:42Z

# 『妖精ヘルツィーニエの牧歌詩』について

福 沢 栄 司

## Über Opitzes Hercinie

EIJI FUKUZAWA

### A. ヘルツィーニエ以前の牧人小説

#### A ヨーロッパで

牧人小説に限定せず、牧人詩をも含めたいわゆる牧人文学を語る場合、BC3C頃のギリシャの Theokrit やBC1C頃のローマの Vergil にまでさかのぼることができるが、牧人小説については通常AC3Cのギリシャの Longusの Daphnis und Chloë からということになる。しかしこの作品はその後新しい牧人小説によって引継がれることがなく、ヨーロッパで牧人小説が隆盛期をむかえるのはイタリアルネッサンスにおいてである。たとえば Boccaccio (1313~75) の Ninfale d'Ameto (1341頃：ローマでの印刷は1478) や Iacopo Sannazaro (1456~1530) の Arcadia (ナポリ, 1504) がある。その後スペインでは Amadis Roman から影響を受けた Montemayor (≒1520-1561) の Los siete libros de la Diana (ヴァレンティア, 1559) が生まれ、イギリスでは Sir Philip Sidney (1554~1586) の The Countesse of Pembrokes Arcadia (未完, ロンドン, 1590; 続篇1593) が生まれた。またフランスでは Nicolas de Montreux (≒1560~≒1610) が1585年から98年にわたって Les Bergeries de Juliette を書いているし、Honoré d'Urfé (1567~1625) の書いた l'Astreé (1607-1627) はその後のヨーロッパの牧人小説の範となっていた。

#### b. ドイツで

他の小説ジャンルと同様に牧人小説もまたドイツでは17Cの前半に外国から翻訳により紹介され隆盛するのだが、その頃にはすでにヨーロッパでの隆盛期は過ぎてしまっていた。まず1595年に Montreux の Bergeries が F. C. V. B なる訳者によって Die Schäffereyen Von der schönen Julianaのタイトルで発行される。また d'Urfé の Astrée も原作が完結する以前の1619年からJ. B. B. V. B の翻訳により1635年までかかってドイツ語化されている。<sup>(1)</sup> Ludwig Khuffsteinen (または von Kuffstein)(1587~1657) は Montemayor の Diana を翻訳している。<sup>(2)</sup> この訳はのちに G. Ph. Harsdörffer (1607~1658) によって改められ、Gil Polo の Diana enamorada の部分をも加えられた。<sup>(3)</sup> また原作からではなくフランス語

訳からであるが Valentinus Theocritus von Hirschberg は1629年に Sidney の Arcadia を翻訳している、<sup>(4)</sup>そして1630年に翻訳によらぬドイツ自前の牧人小説 Schafferey von der Nimfen Hercinie が Martin Opitz (1597~1639) により Breslau で出版される。しかしこの「Hercinie」は Sidney の「Arcadia」のような牧人に変装した騎士冒険小説的ではなく Opitz のパトロンである Schaffgotsch 家をたてるための即興文学の形をしており、従来のヨーロッパの牧人小説の伝統からは離れた、ドイツでしかみられない一形式となっている。

### c. Opitz と牧人文学

とはいえ Opitz はたまたま一時の思いつきから牧人小説を書いたというものではない。「Hercinie」を読むなら過去のヨーロッパの様々な牧人小説から Opitz が多くのヒントを得ていることがみてとれるし、「Hercinie」以外の作品においても牧人文学に対する関心は種々示されている。たとえば Opitz は数多くの牧人詩をつくっているし、彼の最初の文学理論書 Aristarchus (1617) においても Sidney や Sannazaro が言及されている。<sup>(5)</sup>そして1924年に出た Buch von der Deutschen Poeterey において彼は次のように述べている。

牧歌詩あるいは牧人詩とは羊、山羊、耕作、刈入れ、栽培、漁猟あるいはその他の農事について語るものである。通常はそこで語られる、たとえば愛、結婚、死亡、色ごと、祝祭日等々の諸々を田舎風な素朴な流儀で述べるものである。<sup>(6)</sup>

また Opitz は [Hohenlieds Salomons] の序文で牧人文学は「牧人以外の人物、愛について以外の言葉、田野以外のどんな直喩も、例もとることはない。都市を離れ、農耕に従事し、園で食事をとり、果樹のまわりで歌うのである」とも言っている。

これらの Opitz の言説からすぐにも見てとれることは彼の牧人文学への理解というものが、その登場人物とか、背景とか、語られるべき内容とか、あるいはその文体上の制約とかきわめて外面的な形式上のことを主としているということである。その理由の一つとしては Servius の Vergil 解釈から文体上の制約を引いてきたとか、<sup>(7)</sup> Buch von der Deutschen Poeterey での牧人文学に関しての発言は Scaliger <sup>(8)</sup> の詩論第3巻をそのまま借用したものであるとか、あるいは Theokrit などはおそらくギリシャ語を直接読んだのではなく Heinsius らの翻訳によったのではないかなどが考えられるのであるが、それにもましてこうした Opitz の牧人文学理解の姿勢は当時の文学観と深い関わりあいの中で考えてみる必要があるように思われるのである。というのも Opitz の発言が登場人物、詩句構成、文体等を主としているのは牧人文学に限ったものではなく、全般について言えることであり、そうした規範的文学観がとりもなおさず Opitz を当時のドイツ文学改革の第一人者に仕立てあげたのであるし、また一方そうした文学観から生まれた「Hercinie」がその後のドイツの、なかでも国語浄化のにない手であったいくつかの言語協会仲間において範となり、流行していったという事実がなによりもそ

のことを示していると思われるのである。<sup>9)</sup> それ故ここでは「Hercinie」の梗概、構成、文体、詩句構成、あるいは古典や外国文学からの引用などを挙げ、この小説が今日一般に考えられている小説といかにその趣きを異にしたものであったかを見ることで、出来うれば当時の規範的修辭的文学の意味を考えてみる一助としたい。

## B. Hercinie

### a. あらすじ

10月の終りに Opitzはパリへの旅立ちを前にして Riesengebirge を散策する。故郷を去る決心をしたとはいえ、散策中も Opitzは故郷を離れ、恋人を捨てて行かねばならぬことで苦悩し、一篇の詩をつくる。それを古代の牧人の例にならって樹皮に刻んでいて笛の音が近づいてきて、見るとそれは Opitzの友人である Nüßler, Buchner, Venator<sup>10)</sup>の三人であった。樹皮に刻んである Opitzの詩をきっかけに、恋人のもとにとどまるべきか、パリへと旅立つべきかを議論しだす。最初相矛盾する二つの想いだと考えていた恋人への思慕の情とパリ行きとは、もしそれが真の愛であったなら両立するものだという結論にゆきつく。つまりもしその愛が移ろいやすい外面的な美への皮相的なものではなく、分別に裏打ちされたものであり、またその恋人がただ官能的なだけだというのではなく、内面的な美德をもそなえた女性であるなら、たとえ外国へ Opitz が旅立ったとしても不変だろうし、ましてやパリへの旅は種々の有益な経験を与えてくれるはずのものであり、やがて再び故郷へ戻るなら結局は故郷のためにもなるであろう。こうした会話をしていて道に迷い、とある小川に行きつく。そこで妖精 Hercinie と出会うが、彼女は牧人姿の彼らを洞穴に案内し、洞穴の中で湧き出ている泉を指して、この泉がどこへ流れ、どういう地形をなしているのか説明する。またその先には水晶の柱でできた円形の部屋があり、Thalia などの妖精たちが裁縫をしたり、楽器を手にしたり、また故事にまつわる会話を楽しんでいた。壁には種々の歴史が宝石にちりばめられて描かれており、その先には大広間があって Thetis が祭られていた。Hercinie は彼らが学問の徒であるが故にこの洞穴に案内したのだと告げて、その先へと導いていった。その入口には一篇の詩があり、一方には世界創造の歴史が、もう一方には Riesengebirge の様子が描かれていた。Hercinie はこの地の歴史を語り、壁に描かれた Schaffgotsch 家のことを説明する。再び洞穴の外へ出たときには Hercinie はすでにその姿を消していた。彼らはさらに山のむこう側へと散策を続けるのだが、菩提樹にほられた山霊 Rubezahl に捧げられた詩を見つけ、霊の存在について語り合う。偶然白髪のお女を眼にし、茂みに隠れて彼女をうかがっていると、お女は誰何し始め、呪文、まじないを唱えだす。すると突然強い風が吹き、霰、雹が降り、雷鳴がとどろく。ほうほうの体で魔女の呪文のとどかぬところまで逃げ、それにつけても Schaffgotsch 家の領地の素晴らしさが思い出され、詩作する。その後 Schaffgotsch 家の温泉にゆくが、ここでまた泉について一議論し、最後にこの湯治場の美しさに感嘆しつつ四人がそれぞれ詩作り、この散策を終るのである。

## b. 構造

舞台になっているのはドイツ東南部の Riesengebirge で登場人物は牧人に身をかえた Opitz Buchner, Venator, Nüßler の 4 人の詩人, それに妖精 Hercinie と魔女である。小説は一人称形式で書かれており, 途中かなりの量の韻文が挿入されている。梗概から判断して大体以下のように分けができる。

- A (現実世界) a パリへの旅立ちと恋人との別離に悩み散策する Opitz  
 b 途中出会った詩人仲間との分別や愛についての会話
- B (空想世界) a 妖精 Hercinie との出会いと妖精世界の見聞  
 b Riesengebirge および Schaffgotsch 家の歴史
- C (現実世界) a 霊などについての会話と魔女体験  
 b Riesengebirge および Schaffgotsch 家の温泉場の称賛

上記のように分類してみるとこの即興文学がいかにも意図的作爲的な作品であることがみてとれる。A→B→Cの筋の流れには内容的な因果関係, 必然性はない。Aの内容がBへ, Bの内容がCへと展開するのではなく, むしろAの話が一段落したときBへ, つまり妖精 Hercinie の出現の方へ物語を向け, またBで Hercinie が十分に彼女たちの生活の様子や Schaffgotsch 家を称賛しおえたとき Hercinie は姿を消してCの方に話を移すだけである。

Bが妖精 Hercinie の出会いと妖精の住む洞穴という優美な空想世界であるのに対して, A, Cは小説上の現実世界をなしておりBの空想世界をはさんでいる。いわばA, CはBの序であり結となっている。つまり妖精世界——妖精世界の見聞とRiesengebirgeおよびSchaffgotsch家の歴史——がこの小説の眼目なのである。むしろSchaffgotschの称賛を空想世界で果たしていると言った方がいい。空想世界故に現実のパトロンSchaffgotschを荘麗にうたうことができるのであり, また同時に種々の宝石にちりばめられた妖精たちの住処はSchaffgotsch家をうたいあげるにはふさわしい場所でもある。しかしもしそれがただ空想世界の中でしか語られないなら, それはあくまでも空想世界内のこととしてとどまり, その称賛は現実性をもたえない。それ故にBで讃えられたSchaffgotsch家の偉大さを現実で示してみる必要があるのである。その役割を果たしているのがCである。つまりCでは現実に存在するSchaffgotsch家の温泉場を讃え, Riesengebirgeの自然の美しさをうたうのである。Schaffgotsch家をたたえる際, 現実に足をしばられた状態では, 必ずしも十分にそれを果たしえないが故に全くの空想世界においてそれを実現し, またそれがたんなる絵空事の印象を与えないために空想世界で描かれたSchaffgotsch家の偉大さを現実世界で証明してみせるという構造をしているのである。空想世界と現実世界の2つの別世界をもうけることで現実世界でなしえぬ称賛をなし, 空想世界ではもちえぬリアリティをもたせることが出来ているのである。そしてこの妖精にとり囲まれたSchaffgotsch家の荘麗優美な空想世界と現実のSchaffgotsch家とに橋をかける役目を果たしているのが他ならぬ詩人のOpitzであり, Nüßler, Buchner, Venatorなのである。洞穴の中でSchaffgotsch家の系譜を見る前にOpitzはあえて

Hercinie の口から「あなた方牧人たちよ！私たちは天とミュージックとがあなた方になにを与え、またいかなる学問的好奇心にあなた方がとりつかれているのかを知っております。それだからこそ（……）私はあなた方にここの壁画や文字がなにを意味しているのかお見せ致しますよう<sup>111</sup>」と言わせている。これに類した詩人の存在意義を認めさせようとする発言は「Hercinie」内においてもいくつかみられる。<sup>112</sup>つまり後世にまで貴族たちの偉業を伝える役割を詩人が担うことで、詩人は貴族たちから経済的援助を受けるという共存関係を Opitz は考えているといえる。<sup>113</sup>それは外国語の影響下で混乱していたドイツ語の浄化を実践していった Opitz の詩人としての自負であると同時にまた宮廷依存から脱却しえぬ17C初頭の詩人の現実の姿でもあろう。ともかくこの「Hercinie」が Schaffgotsch 家を讃えるためのものであり、そのための妖精たちの住処の案出であり、Riesengebirge の散策であることがわかったのだが、散策の途上においてなされた旅や分別や愛についての饒舌な会話は直接には Schaffgotsch 家の称賛と結びつかない。それにもかかわらずそうした会話がなされている理由としてすぐにも考えうるのは牧人小説では恋愛がその形は異なるにしても常に大きなテーマになってきたという伝統である。またより一層当時の文学的傾向に即して考えるならこの種の話題は詩人たちにとってもっとも得意とするものであったといえる。比喩を多用した饒舌な会話は彼らの博学ぶりを如何なく發揮しており、学者詩人（der gelehrte Dichter）の呼び名にふさわしいものであって、詩人の宮廷での有用性を示すためであるともいえるであろう。有徳、誠、愛、分別がどのようにして結びついたとき、人は高貴となりうるかという論議なのだが、論議以前に確たる道德規範が存在しておるのであって、詩人はそれにのっとって話をすすめているにしかすぎない。彼ら学者詩人はその道德規範に疑いをさしはさむのではなく、道德規範の有効性を詩人がいかに雄弁に語りうるものであるのかを示すための会話といえるのである。さらにもう一つ考えられる理由として Opitz の個人的都合からそうした話題を扱んだということがある。この本の発行されたのは1630年であるが Opitz はこの年の2月から10月まで実際にパリに旅行しており、この旅行のための経済的援助を Schaffgotsch 家におおいだのではないかと考えられる。というのも Opitz は1629年には、Hans Ulrich von Schaffgotsch の好意で Warmbrunn の温泉に滞在しており「Hercinie」は29年にはすでに完成し、Hans Ulrich に献呈されているからである。この会話では結局精神的理性的な愛ならば時や所を越えて永続するものであり、おまけにパリへ行くのであれば故郷にもプラスとなってかえってくるだろうという結論になっていたのだが、こうした会話において Opitz は一度として積極的に発言していない。もっぱら Venator と Nüßler が話しており Opitz は傍観者であり、むしろ故郷に留まる方を択ぶべきではないかという意見を代表している。それを彼の友人たちがパリへ行くべきだと説く形をとっている。パリ行きを志願している当人では言いづらいことでも第三者の立場にいる友人なるが故に存分に発言しえており、友は Opitz の優秀さをもってすればパリ行きは予想以上の利益をもちかえるものだと言ったりも出来るのである。そしてまたCでの魔女体験から Opitz は自分の恋人（故郷）への愛がけっしてきまぐれからのものだったり、デモーニッシュなものでもなく、ずるさとか悪だくみとかにも無縁な

真の愛だということ、つまり自分の愛はたとえ遠くパリにいても不変のものだったのだと自ら認めるという段取りになっているのである。

### c. 文体と韻律

この時代の作品と比較するならむしろ控え目だと言う方が妥当だろうが、程度の差はあれ今日からみると17Cの文学のほとんどがそうであるようにこの「Hercinie」もまた形容過多であり、比喩的語法が多く、誇張した表現が数多く見受けられる。散文中特に目立つのは直喩法であり、*wenn auch, als ob, ebenso wie* の多用である。たとえば次の様な表現がある。

正しい美しさに通じておらぬ者の称賛する美しさなどというのは昔のエジプトの寺院とことは同じではなかろうか。なるほどエジプトの寺院は寺院自体は高価で華麗に建てられている。しかしもしきみがそこに神をたずねたとしても、きみは神の代りに雄山羊か猿か猫を見つけるぐらいのものだろう。きみがもしもなにか美しいものを見たいと望むのであれば、きみは分別の目に相談し、ちょうど馬を手綱に、弓を狩人に、船を船頭に、そして工具を師匠にまかせるのと同じように愛の奔放な好奇心を分別の眼に従わせるべきなのだ。<sup>14</sup>

もっと長くなるとパリ行きを主張する際に太陽、月、星の周期的運行、あるいは潮の満干、あるいは獣、魚、渡り鳥などの例を挙げて延々と続くのである。あるいはまた誇飾的表現も多い。

春： die herbeynahrung des liebsten Buhlen

太陽： den schöne Himmelsschild

春： den Maler dieser Welt

恋愛詩： ein Gedächtniss seiner Sorgen

誠： das feste Bard der wahren Gunst

パリ： die Zier der Städte, die Schule der Leitseligkeit, die Mutter der guten Sitten.

心情： das freie Teil des Menschen

愛： eine Hoffnung der Unbedachtsamkeit, eine Beherrscherin eines knechtischen Herzens

ミューズ： die Schwestern weiser Zungen

対句的表現も数多い。

die unvernünftige Vernunft

die reiche Armut

eine Arbeit des Müßiggangs, betrübenden Fröhlichkeit (愛のこと)

zwei unachtsamen Thürhüter (眼のこと)

ein unparteyischer Schiedmann zwischen Tag und Nacht (春の太陽のこと)

こうした対句的表現は無論散文に限ったものではなく韻文においても数多い。<sup>15</sup> 韻文は全部で30ある。詩脚はすべてヤンプスカトロヘウスであり、ヤンプス25、トロヘウス5である。詩行については四揚格6、六揚格24となっている。六揚格ヤンプスつまりアレクサンドリーナ詩行が圧倒的に多くBuch von der Deutschen Poetereyでの自説を実践している。詩形としてはソネットが4と、セステイーネが1ある。ソネットの韻のふみ方は一般的な abba abba cdc dcd という形ではなく三行詩節の押韻の仕方は ccd ccd のものが二、ccd eed が二となっている。また四行詩節2と三行詩節2とからはなっているのだが押韻形式が全行 t となっている18行詩もある。この小説中ただ一つあるセステイーネはアレクサンドリーナ詩行からなっており、押韻形式も第一詩節の各詩行末の語が全詩節の行末で用いられ、その反覆順序は各詩節の一行目の行末語が次節の二行目の行末語になり、二行目の行末語は次節では三行目の行末語に、そして六行目(つまり詩節の最終詩行)の行末語は次節の一行目の行末語になっている。非常に複雑で装飾的的技巧的であり、最後には三詩行からなる随節(Geleitstrophe)もつけられている。これにより Opitzはセステイーネをドイツ語詩に導入した最初の人となった。<sup>16</sup> また[Hercinie]中で特徴的韻文の形式として聯詩がある。Venator, Buchner, Nüßler が順順に詩を詠ずるのだが、アレクサンドリーナ詩行であるために、たとえば Buchnar が句切り(ツエズール)までうたうと Nüßler はその詩行の後半六音節を引き継ぎ次の Venator に同様にしてうたい流すのである。三人が九回づつうたい最後にそれを受けて Opitzが四揚格ヤンプスの詩でしめくくっている。

#### d. 模倣と引用

さきに[Hercinie]をドイツ最初の自前の牧人小説と書き、また Schaffgotsch 家を讃え、かつ詩人への援助を頼んでの内容と形式であると書いた。しかしながらそのことは[Hercinie]の内容形式が Opitz 独自のものであることを意味しない。むしろ今日の文学観からするならば、たして[Hercinie]が自前の作品と呼ぶに相応しいものかどうかという疑問すら抱きうるものである。牧人に変装した主人公が妖精たちに出会い、洞穴の中で稀有の体験をするという筋も、ギリシャ文学、あるいはラテン文学、また当時の Sidney, Sannazaro, Montemayor あるいは d'Urfe 等の作家から多くのヒントをえたものであったり、あるいはそのままドイツ語に訳したもののさえもいくつか見受けられるのである。

Sannazaroの[Arcadia]は主人公 Sincero が故郷を去り Arcadia の田園をさまようが、別れた恋人のことが頭を離れない。途中思いがけずも小川で妖精に出会い、彼は洞穴へと案内される。そこで様々な見聞をしたのち Sincero は再び帰路につくが、同じく牧人に変装した友だちと出会って、妖精との一部始終を語るという筋をもっている。事件の前後関係は異なる



としても「Hercinie」との類似は明らかであるし、泉の源が「Hercinie」同様洞穴内にあり、この洞穴には Schaffgotsch 家の歴史を語る壁画や文字を連想させるような碑が刻まれている。また Sidney の「Arcadia」にも同様に洞穴が描かれており、「Hercinie」での Schaffgotsch 家の始祖が語られている広間を連想させる。沢山の部屋のついた不思議な建物があつて、中に一つ大きな広間があり、すぐれた名のある芸術家の手になった数多くの美しい壁画が飾られている。その壁画は様々なギリシャ神話を語っており、またその次には小説中で重要な役割を演じている人物 (Philoclea, Basilius, Pamela 等) の肖像が描かれており、これは「Hercinie」での世界創造の歴史から始まり、黄金、白銀、土、鉄の時代、ノアの洪水等順々に描かれ最後に Schaffgotsch 家の歴史がつづくという場面に酷似している。あるいは Montemayor の「Diana」でも牧羊神の住む洞穴がでてくる。その様子の華麗さは Sannazaro の「Arcadia」同様、「Hercinie」の洞穴描写に通ずるものであろう。d'Urfé の *l'Astrée* でもデーモンの洞穴ではあるが描かれている。Opitz 以前の牧人小説の多くは牧人世界で妖精や牧羊神と出会い、その住処に案内されて稀有の体験をするという筋が一つの形式と化していたとさえいえるのであり、それを Opitz がとり入れたものなのである。

全体の構成の点では Sannazaro の「Arcadia」が、また始祖の広間の描写については Sidney の「Arcadia」との類似が目立つ。構成上の類似点だけではなく、細部に渡って Sannazaro, Sidney の「Arcadia」や Montemayor の「Diana」との類似点が指摘できるし、さらには Cicero, Seneca Platon からの引用あるいはラテン文学の詞華集からの引用なども認められている。<sup>17)</sup>

別れた恋人を思つての詩を樹皮に刻む Opitz の行為は Vergil や Theokrit の牧歌詩になつたものであるし、「どこにでもいる者とは、またどこにでもない者だ」<sup>18)</sup> という Nüßler の発言は Seneca の *nusquam est qui ubique est* (Epistolae 22) そのままであるし、それに答えての Opitz の発言「きみもよく知つてのとおり、考えごとをしている者は、一人のときほど一人ではないものなのだ」<sup>19)</sup> は Cicero の *numquam se minus otiosum esse quam cum otiosus nec minus solus, quam cum solus* (De officiis III, 1) の訳である。また彼らの間でなされる分別と愛についての問答での両者の関係は明らかにプラトンのそれである。<sup>20)</sup> その問答中に挿入された詩

海を信ずるも、女を信ずるなかれ  
 そは女の愛の波浪にもましてもろきが故なり。  
 女の性は善ならず、なかに例外ありとて  
 われ悪女の善女となりしを知らず<sup>21)</sup>

は A. Hübner によればラテン詞華集 (ed. Meyeri 245, P.L.M. Baehr. N. P350. no 425) に次の様にでている。

crede ratem ventis, animum ne crede puellis,  
 namque est feminea tutior unda fide ;  
 femina nulla bona est ; vel, si bona, contigit ulla,  
 nescio, quo fato res mala facta bona est.

あるいは「心の花というのは美しい肉体につつまれて、より優美になる。それ故肉体の美が他ならぬ徳の華の闘士、かつてない程の偉大な美の英雄となるのである」云々<sup>22</sup>という言葉は、Vergil の *gratior et pulchro venies in corpore virtus* (Aeneis V 344) からのものであろうし、「流れることのない水が結局は腐り、悪臭を放ち出すように、われわれの心情もまた過度の憩によって、怠惰で無情なものになってしまう。われわれの心情は天上的なものだから、われわれもまた間断なく活動している天に従うべきだというのも当をえていることだ……」<sup>23</sup>のくだりは Ovid の *Cernis ut ignavum corrumpant otia corpus ut capiant vitium ni moveantur aquae* (Epistolae ex Pontò I 5,5) からである。また *Hercinie* が牧人たちに呼びかけた詩中の一節「なに故に友となり敵となつてねたみ合うのか」<sup>24</sup>は Ovid の… *effodiuntur opes, irritanenta malonum* (Matamorphoses I .140) からであらうし、洞穴内の *Thetis* の祭られた室内の描写も同様に Ovid の *Metamorphoses* からヒントをえている。また始祖の広間に刻まれていた *Christoff* の詩:

私は右にも左にも有徳であった。  
 なに故か。行なうにふさわしいことを  
 書き、読み、かつまたその一方で  
 そうした行為を讃える者が十分に書きうることを  
 なしたがためなり。<sup>25</sup>

これは *Plinius* の… *equidem beatos puto, quibus deorum numere datum est aut facere scribenda, aut scribere legenda, beatissimos vero, quibus utrumque.*(Epistolae IV16,3) からである。

### C. むすび

一貴族を讃えるための小説。文学の有用性を説き、詩人への援助をたのんだ小説。その構成、内容の大半を外国文学や古典からの引用によつた小説。登場人物の心理的葛藤などとはおよそ無縁な恋愛談義と教訓めいた言説の多い小説。まるでお伽話のような世界が現出する非現実的小説。挿入された韻文の大半がヤンプスで、それもアレクサンドリーナ詩行が圧倒的に多い小説。それがこの「*Hercinie*」である。どの点を考えたとしても今日の評価規準をしては文学作品として成立しがたいであらう。しかしながらさきに述べたように「*Hercinie*」はその後多くの後

継者を生んでいるのである。それは Opitz が „Buch von der Deutschen Poeterey” の著者であり、かつ文学によって貴族の称号をうるまでになった者であるが故というだけでは説明がつかない。むしろ逆に今日とはまったく違った文学の役割の故に貴族をたたえ、詩人の有用性を説き、外国文学や古典を積極的にとり入れ、教訓があり、一方でまた夢のある、また韻文は厳密な詩句構成からなっている文学が当時まさに求められていたと考える方が正しいのだろう。厳密にすぎるとさえいえる韻律は混乱した言語状況にあつては、まずなによりも望まれたであろう。小説は婦女子の読むものであり、百害あつて一利なしという風潮の中では教訓めいた言説や古典への教養を盛ることは必要であつただろうし、文学的後進国では諸外国文学への教養は必要不可欠な一つの大きな価値でもあつた。また貴族からみれば自己の領地をたたえ偉業を書き残してくれるものであり、詩人からすれば詩人の有用性を優雅に説いてくれているのである。国語浄化の運動は一面でナショナリズムと結びついた運動であるが、それは逆に自国の後進性を認めていることのうら返しという側面をもつものであり、それだけに古典、外国文学からの借用、引用が自国の自然や人物とたくみに融合されているのを見たなら自国文学への自負を強くしたのであろう。つまり詩人が宮廷に依存せざるをえぬなかで、混乱した言語状況を改革し、一方で小説軽視の風潮を是正しようとして意図された作品であり、種々の相対立する立場からの要求のすき間をぬってなされた極めて作為的な作品だといえる。ドイツ語を詩語にという欲求があり、そこへいかなる要素を盛り込むことが出来るかが肝要なことであつた。散文と韻文、叙事と抒情、メルヒエン、伝説、神話、歴史、哲学、地理等々。つまりどのように語りつなげるならば、それが統一された形態をもちえ、かつ文学的表現にかなつたものとなりうるかに腐心したのが「Hercinie」だといえるのであろう。

### テ キ ス ト

M. Opitz : Schäfferey von der Nimfen Hercinie. RUB 8594

### 注および参考文献

- (1) ドイツ語のタイトルは Von der Lieb Astreae und Celadonis Einer Schäfferin und Schäffers (ニュルンベルク) 1619; この第1部に続いて第2, 第3部が Die Schäfferin Astreae のタイトルで1624にハレで、第4部は1635にライプツィヒで出版されている。
- (2) ドイツ語でのタイトルは Erster vnnd anderer Theil Der neuen verteutschen Schäfferey, von der Schönen verliedten Diana, und dem vergessenen Syreno (ニュルンベルク) 1619; 第1部は Montemayor からの翻訳であるが、第2部は Alonso P'erez の手になる続篇 (Segunda parte de la Diana, ヴェレンティア, 1564) の翻訳である。
- (3) Harsdöffer は第3部はスペイン語のオリジナルからではなく、Kasper Barth (1587~1658) のラテン語訳からとっている。

- (4) 著者は Theocritus von Hirschberg と M. Opitz の 2 名となっているが、おそらくは Opitz は前口上しか書いてないだろうと今日では考えられている。なお Opitz は 1638 にこの Arcadia を改訳している。
- (5) 正しくは Aristarchus sive de contemptu linguae Teutonicae. ... Cum Italia tot Petrarchas, Ariostos, Tassos, Sannazaros ..... Angelia Sidneos et alios poetas in dedecus nostri et erprobationem eduxerit usw .....
- (6) RUB 8397/98, S28.

同書の別の個所では以下のような記述もある。(S40)

In den niedrigen Poetischen sachen werden schlechte vnd gemeine leute eingeführet; wie in Comedien vnd Hirtengesprechen. Darum tichtet man jhnen auch einfaltige vnd schlechte reden an / die jhnen gemässe sein : So Tityrus bey dem Poeten / wenn er seines Gottes erwehnet / redet er nicht von seinem plitze vnd donner sondern

*Ille meas sagt er / errare boues, vt cernis et ipsum Ludere quae vellem calamo permisit agresti.*

- (7) Servius ed Thilo et Hagen, vol. III. P.4
- (8) Scaliger. poetices I VI. ap. Petr. Santandream, 1594. P 379. (I III. C. CXCIX). (7). (8) については A. Hübnerid. erste dt Schäferidyll & s. Quellen. S.10 を参照
- (9) たとえば Paul Fleming は Auf des ehrnuesten und wolgelahrten Herrn Reineri Brockmanns und der erbarn viel ehren- und tugendreichen Jungfrauen Doretheen Temme Hochzeit を書いているし、Georg Neumark は Betrübt verliebter doch endlich hochehfreuter Hürte Filamon wegen seiner edlen Schäffer Nymphen Beliflora を書いている。
- (10) Wilhelm Nüßler は Georg Rudolf von Liegnitz の宮廷顧問として活躍した人物で、1631 に Opitz のラテン語詩集を出版している。Silvarum libri tres, Epigrammatum unus. Balthasar Venatar は Heidelberg の学生時代 (1629) にすでに Opitz を知っていた。August Buchner (1591 ~ 1661) は Anleitung zur deutschen Poeterey (1663) で知られているが、Opitz は 1625 の夏に Wittenberg の彼のところで過ごしている。
- (11) RUB. 8594. S. 30
- (12) RUB. 8594. S. 36

Soll ich mich schämen dann das des namens der Poeten?

Ist kunst vndt wißenschafft dem adel nicht von nöthen?

Standt blüet durch verstand:hettich nicht standt gehabt / So hette mich verstandt mitt adel doch begabt.

S. 60

Du Hochberedter mann / dem Rom muß schuldig sein Die Freyheit / vndt sich selbst / vndt alle sein Latein / .....

S. 65

Deine blüte / deine wercke /

Diese ritterliche stärcke

Fühlet endtlich doch die zeit:

Komm / Heldt / frist dir das leben /

Komm / Thalia wird dir geben

Einen krantz der ewigkeit

- (13) Vgl. RUB 8594. Nachwort S. 71 ff
- (14) RUB 8594. S. 16
- (15) RUB 8594. S. 31

Sucht goldt das eisern macht / .....

Den demant findet kaum der schwartzte Moor so weiß

- (16) Vgl. A. Hübner, Das erste deutsche Schäferidyll und seine Quellen.  
Diss. Königsberg 1910. S. 46
- (17) Opitz 訳の Sidney's Arkadia(1638) と „Hercinie” と „Zlatna” および Montemayor の „Diana” に共通した表現がいくつか見られるが, A.Hübner.S. 47ff に詳しい.
- (18) RUB 8594. S. 13
- (19) (18)に同じ
- (20) Vgl. プラトン【パイドロス】246 A, 253 E, 254 E

【饗宴】 210b

ひっきょう肉体である限り, いずれの肉体の美もほかの肉体の美と同類であること, したがってまた容姿の美を追求する必要のあるとき, 肉体の美はすべて同一であり唯一のものであることを考えないとしたら, それはたいへん愚かな考えである旨を理解しなければならないのです. この反省がなされたうへは, すべての美しい肉体を恋する者となって, 1個の肉体にこがれる恋の, あの激しさを蔑み軽んじて, その束縛の力を弛めなければなりません. しかしそれに次いで, 魂のうちの美は肉体の美よりも尊しと見なさなければなりません. (中史公論「世界の名著」プラトン I, P 166)

- (21) RUB 8594. S. 17
- (22) " " S. 18
- (23) " " S. 21
- (24) " " S. 26
- (25) " " S. 34

(昭和50年 9月30日受理)